JSPCCS-JCC Joint Session

JSPCCS-JCC Joint Session
成人期の川崎病ー動脈瘤と石灰化病変への対策ー

座長:
濱岡 建城 (京都府立医科大学)
中村 正人 (東邦大学医療センター大橋病院)
Fri. Jul 17, 2015 4:40 PM - 6:10 PM 第3会場 (1F ペガサス C)
JJS-01～JJS-04
所属正式名称：濱岡建城(京都府立医科大学大学院医学研究科　小児循環器・腎臓学)、中村正人(東邦大学医療センター大橋病院　循環器内科)

[JJS-03]川崎病成人例に対する冠動脈バイパス術

○丸山 雄二, 落 雅美, 白川 真, 佐々木 孝, 大森 裕也, 坂本 俊一郎, 宮城 泰雄, 石井 庸介, 師田 哲郎, 新田 隆 (日本医科大学　心臓血管外科)
Keywords:川崎病, 冠動脈バイパス術, 内胸動脈

【背景】川崎病成人例における冠血行再建術の適応は明らかでない。川崎病発症後5年以上が経過した冠動脈瘤は高度石灰化を伴うことが知られており、一般的な PCIのテクニックは適用されずロータブレータを用いた治療が中心となる。また低左心機能例、多枝病変、入口部病変、病変長が長い場合などは原則的に PCI適応外であるため、CABGが担う役割は大きい。【目的】川崎病冠動脈疾患における冠血行再建術は、長期開存性が証明されている ITAの使用が大原則である。当院では、(1)ITAを LADに吻合する、(2)可及的に両側 ITAを使用する、(3)静脈グラフトを使用しない、以上の方針に従っている。当院における治療方針の妥当性を検討した。【対象と方法】1991年から2014年までに川崎病の既往を有する41症例に対して CABGを施行したが、20歳以上の成人7症例について検討した。手術時年齢は20-37歳(平均29.3±5.3歳)。 LMT病変の1例を除いた6例すべてが CTO病変(LAD：5例、 RCA：5例)であり、4例に LCxの狭窄病変を認めた。2例に LADに対するローターブレータが施行されていた(1例は開存、1例は再狭窄)。平均吻合枝数は2.4±0.5枝。使用グラフトは、 LITA：6、 RITA：7、 GEA：1、 SV：0であり、 LADに病変を認めなかった1例で LITAを温存、 RITAは3例においてフリーグラフトとして使用した。【結果】手術死亡なし。術後観察期間4年～21年(平均10.0±5.4年)において遠隔期死亡、心事故ともになく、全症例が NYHA： Iで経過している。すべてのグラフト開存を確認している。【結語】川崎病若年成人に対して動脈グラフトのみを使用した CABGを施行し良好な結果を得た。若年成人における川崎病冠動脈病変は CTO病変が多く PCIが困難な症例も多い。 LITA-LAD graftingを中心とした両側 ITAを用いた血行再建が重要である。

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery